

聖書:ルカの福音書1章1～23節

説教:あなたは信じなかった

はじめに

毎年、この季節になると町ではクリスマスツリーを飾ってクリスマス気分を盛り上げてくれます。教会では、今日から主イエスの御降誕を待ち望むアドベント（待降節）の季節に入ります。誕生日を祝うことはわかりますが、その前になぜこのような期間が設けられているのでしょうか。教会も町のデパートと同じようにクリスマス気分を盛り上げるためにしているわけではなくて、きちんとした理由があつてしております。それには聖書が書かれたイスラエルの歴史をすこし振り返る必要があります。

1 イスラエルの歴史

1) 神の国であるのに

神はアブラハムをとおして、アブラハムの子孫であるイスラエルの民を神の国に導き入れると約束したのですが、紀元前586年に新バビロニアという国に攻め込まれて国を失ってしまい、主だった者たちは補囚という形で外国に連れて行かれ、そこで働かされるという苦しみを味わいます。やがて補囚の民は戻ることが許され、国を再建することにはなるのですが、いつも外国の軍隊に支配されてばかりです。そうしますと当然のことですが、イスラエルは神の国のはずなのに、どうして自分たちはこんな目に遭わなければならないのか。そんな疑問が湧いてくるわけです。それで神はどうされたか。

2) マラキの預言（マラキ3章1節）

紀元前四百年頃に活躍したマラキという預言者を通してこう語ります。マラキ書3章1節。「見よ。わたしはわたしの使いを遣わす。彼は、わたしの前の道を備える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、彼が来る。万軍の主は言われる。」

神はイスラエルを忘れたのではない。必ず使いを遣わし、彼は救い主がとおられる道を備えることになる。その時を待ちなさい、と励まします。

これを聞いたイスラエルの人たちは喜びます。目の前には苦しみがあるけれど、道を備えるものと、救い主が必ず遣わされてくると信じて待つことにした。ところが紀元前63年にローマ軍が攻めてきてエルサレムが陥落してしまう。ユダヤ人は、そん

な苦しみに襲われてもなお神の約束を信じ続けるわけです。それがアドベントの由来であります。

注意していただきたいのは、アドベントはイエス・キリストが中心であることはもちろんなのですが、その前に主の道を備えるものが先に遣わされてくる。そのような二段階になっていて、ここは、先に使わされてくる者がどのように誕生するのかが語られている箇所になっております。

2 御使いが現れる

1) ザカリヤ

さてマラキを通して語られた約束はどうなったのか。実はそれが今日開いている箇所に書かれている。祭司ザカリヤは、神の前に正しい人であり、また祭司の努めもきちんと果たしていた。そのザカリヤがあるとき役割があたって神殿に入って香をたくことになる。ものの本によれば祭司が神殿で香をたけるのは、一生のうち一度だけであったそうです。香をたくにも手順があつて、一つでも間違え死ぬ可能性がある。そのような危険な任務です。ですからザカリヤはいろいろな意味で緊張しながら努めを行っていました。そこへ突然御使いがブリエルが現れます。ザカリヤがうろたえるのは無理ありません。

2) 立ち返らせる

御使いは、ザカリヤの妻エリサベツがやがて男の子を産むことになるから、その子をヨハネと名づけるようにと伝えてから16節でこう語っています。「イスラエルの子らの多くを、彼らの神である主に立ち返らせます。」また17節の後半。「父たちの心を子どもたちに向けさせ、不従順な者たちを義人の思いに立ち返らせて、主のために、整えられた民を用意します。」お気づきのように、「立ち返らせる」ということばが二度繰り返されています。

立ち返らせると言うということは、逆に言えばイスラエルは立ち返っていない。すなわち神に対して不従順な者たちである。そう言われている。そのことは旧約聖書に書かれている。あなたがたが国を失ったのも、神の警告を無視し、神にそむいて離れたためであると何度も言われてきた。それでも神は投げ出すことなく、立ち返りなさいと言いつつ続けます。これから生まれてくるヨハネが、イスラエルを神に立ち返らせ、主のために、整えられた

民を用意していく。そのような役割を担っています。

すこしわかりにくいのは17節の、「父たちの心を子どもたちに向けさせる」ではないでしょうか。なんだろうこれだと思います。実は最初に触れたマラキ書の4章6節にこう書かれています。「彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。」

これは17節の「不従順な者たちを義人の思いに立ち返らせて」とほとんど同じことを言っていると考えると良いでしょう。

3) エリヤの霊と力で主に先立って歩む

そのことは誰がやるのか。もちろんヨハネですが、ひとりでするのではない。17節前半に「彼はエリヤの霊と力で」とある。エリヤは第一列王記に登場する預言者で、当時の王様が信じていた異教の神バアルの預言者たちをカルメル山に集めてたった一人で戦ったことで有名です（週報の写真参照）。王に逆らうわけですから、宗教的な戦いであると同時に政治的な戦いです。結局預言者たちとの戦いには勝ったのですが、王さまからいのちを狙われることになってしまいます。それがエリヤでした。

同じようにヨハネも、時の王様ヘロデに批判の声をあげます。ヘロデが兄弟の妻をめとっているのは律法に反していると人々の前で大声で叫ぶわけです。そのために逮捕されて、ご存じのように最期は首を切られて殉教します。何とまあ残酷なと思いますが、そうやってヨハネは、十字架に向かわれる主の道を用意したことになるのです。

3 なぜ口がきけなくされたのか

1) 信じなかったのだ

さてこれを聞いたザカリヤはどうしたか。彼は祭司ですから、旧約聖書はよく知っています。御使いが語ることがマラキ書の預言のことであることはすぐにわかります。ですから、まったく初めてのことを聞かされたわけではない。ところが彼は非常にうろたえながらこう答えます。18節。「私はそのようなことを、何によって知ることができるでしょうか。この私は年寄りですし、妻ももう年をとっています。」

そうしたら御使いは言います。20節。「見なさい。これらのことが起こる日まで、あなたは口がきけなくなり、話せなくなります。その時が来れば実現する私のことばを、あなたが信じなかったからです。」

皆さんこれを読んでどう思われるでしょうか。ひどいと思いませんか。人間には常識というものがあって、それで多くのことを判断しながら生きています。年寄りに今さら子どもが生まれるはずはない。それが常識というものです。それが突然予告なしに目の前に現れて、常識に反することを語られ、それを全部疑わずに信じろと言われる。相当無理がある。挙げ句の果てに、あなたは信じなかったと言われて、口をきけなくされてしまう。そればかりでない。後の所書に書いていますが、耳も聞こえなくなったようです。普段から不信仰な者であったというのならまだわかる。ザカリヤもエリサベツも二人とも神の前に正しい人だったとわざわざ書いてある。ちょっと混乱してしまいます。

そんなことを言われなかったために、あのときこう答えるべきだったのでしょうか。「わかりました。私はあなたが語ったことはすべて信じます。」そうしたら、こんな目に遭わずに済んだかもしれない。でもどうでしょうか。何か不自然ではないですか。私たちは、神の前で演技しなければならないのか。そんなはずはない。心に思っていないことを言って嘘をつく必要はないはずです。むしろ、心に思ったことを正直な思いをそのまま語って良いはずで、神はそのまま受けとめてくださる。それが私たちの信仰です。

ですから、ザカリヤの答え方がまずかったとか、信仰がなかったからとか、そんな見方をすべきではなく、もっと積極的な理由があつて彼は口をきけなくされたと考えるべきです。

2) 口がきけなくなることによって

理由はいろいろ考えることができます。

たとえばザカリヤが、神殿の外に出て人々に今御使いから聞いたことをすぐにべらべらとしゃべりだしたらどうなるか。自分の身に今何が起きたのか、静まって考える時間がない。ただ興奮して「すごかった」と言うだけで、何がすごいのかよく理解できない。受けとめて消化するには時間がかかる。ザカリヤの場合は十ヶ月という時間が必要だった。御使いが口をきけなくさせたのも、ザカリヤに静まって考える時間を与えるためだった。そう考えることができるでしょう。

私たちもときどきそのような経験をします。神さまから不思議なお取り扱いを受けて、その結果「すばらしかった」と神をほめたたえることがあります。でもそれで終わりではない。何年かしてから振り返ると、あのときは気がつかなくたけれど神のみわざの驚くべき配慮にもう一度声をあげるとい

とがあります。神の恵みを知るのには私たちは時間をかけなければ分からないときがあります。それが一つ。

そしてもう一つの理由。ザカリヤは自分の職務である祭司の努めについてもよくわきまえていた。神殿は神の臨在の場所であるとわかっていた。でもどうですか。御使いが現れたら腰を抜かすほどうろたえた。知識として知っていたのに、実際にそのとおりにになると驚く。

ザカリヤはまた旧約聖書を学んで救い主が来られることを知っています。でも突然にそれがこれから来ますよと言われたら、信じられなかった。知っているけれど、それはずっとさきのことでしょうとぼんやりと考えていた。待ち望む心はどこかにいつていました。

でも口がきけなくなり耳も聞こえなくなったらどうですか。ザカリヤの場合は、ヨハネが生まれなければ治らないわけです。治ると言うことは、イコール、ヨハネが生まれることと結びつく。だれだって早く元の健康な身体になりたいと願う。とすれば、ザカリヤはヨハネが生まれることを心の底から願わなければならなくなる。

3) 信仰を強めるために

こうして見ると、御使いがザカリヤの口を閉じさせたのは、信仰がないからではなかった。ザカリヤの信仰をもっと強くするためだった。人々が神を恐れて、神をますます待ち望むことができるように、そのような配慮があつてされたことだった。そういうことでした。

神がマラキを通して語られたことはおよそ四百年の時を経てザカリヤとエリサベツの夫婦の間に生まれたヨハネによって成就します。そのヨハネが救い主イエス・キリストの通る道をまっすぐにしていきます。